



【俳優・キャスティングプロデューサー】

■伊達 弘 (だて ひろし)

昭和6年、京都府出身。東映の役者としてデビュー。映画では、網走番外地シリーズ(第2~18作)、海燕ジョーの奇跡(1985、藤田敏八 組)、遠くて近い友(1996、金組)を継承丞指導し、シャ乱Qの演歌の花道(1997、滝田洋二郎 組)など多数出演。TV・ドラマでは、TBS「Gメン75」全作品の殺陣指導、日本TV「太陽にほえろ」、TV朝日火曜ドラマリング「お姉さんの朝帰り」など。Vシネマでは、世紀末博狼伝サガⅠⅡ(高瀬 将嗣組)の手本引き指導と出演。その他TV、講演、雑誌取材などを受けている。また、特技を生かしアクションディレクターとしても活躍し、1984年、東映を退社後もその実績と人脈を兼ねて、音楽番組をはじめ、レギュラードラマやバラエティなどのキャスティングを多数手掛け、キャスティングプロデューサーとしても活躍中。高倉健とはデビュー時からの親交も深く、「ガチャやん」と愛称で呼ばれていた。



【映画監督】

■内藤 誠 (ないとう まこと)

1936年生まれ。1959年早稲田大学政経学部卒業後、東映に入社。石井輝男、深作欣二、成澤昌茂らの助監督を勤める。1969年「不良番長・送り狼」で監督デビュー。「地獄の天使・紅い爆音」「若い貴族たち・13階段のマキ」「番格ロック」「十代・恵子場合」などを撮ったのちフリーに。以後、「時の娘」「俗物凶鑑」「スタア」「明日泣く」「酒中日記」を自主製作で監督。脚本に「血染の代紋」「廃市」「ルパン3世・風魔一族の陰謀」など。児童映画「わたんべ」で文部大臣賞。「生きものと教室の仲間たち」で総理大臣賞。著述として「インディアン日本をめざす」「昭和の映画少年」「ベボン博士のカクテル・パーティ」「シネマと銃口と怪人」「昭和映画史ノート」「偏屈系映画凶鑑」「監督ばか」など。翻訳にサローヤン「ロック・ワグラム」「マーロン・ブランド自伝」「快楽亭ブラック」(翻訳特別功労賞)など。



【プロデューサー】

■瀬戸恒雄 (せと つねお)

(株)石井輝男プロダクション代表取締役。(株)パナック代表取締役。
1970年 東映(株)入社 同年、東映興業(株)に出向。その後、東京撮影所製作部へ異動。多くの作品の製作現場を体験後、77年企画部プロデューサーへ転出。以後、映画やTVドラマ、Vシネマ、アニメの企画プロデューサーとして全てのジャンルにわたり活躍、多彩な企画力は業界屈指。「多羅尾伴内・鬼面村の惨劇」が一作目の作品で、その後、「暴力戦士」「天使の欲望」を手掛け、「ダンプ渡り鳥」「悪女かまきり」「ぼくとぼくらの夏」「友情」など映画を中心に企画活動を進める。作品をジャンル別に挙げると、戦争三部作として「二百三高地」に続き「大日本帝国」、「日本海大海戦海ゆかば」、また、文芸ロマン作品では水上勉原作の「白蛇抄」、渡辺淳一原作の4作品「ひとひらの雪」、「化身」、「別れぬ理由」、「桜の樹の下で」に続き東宝洋画系で公開された「花の降る午後」の映像化を手掛ける。薬師丸ひろ子主演の「Wの悲劇」や「野蠻人のように」の様なアイドル映画や社会派映画として評価された「誘拐報道」にも挑戦した。アウトロー映画のジャンルでは、「シャコタン・ブギ」、「疵(きず)」、「まむしの兄弟」、「新・仁義の墓場」、「実録 安藤昇俠道伝 烈火」、「やくざの詩 OKI TE」、「牛頭(ごず)」など多数。杉本彩主演の「JOHNEN 定の愛」、「BLOOD ブラッド」、などの異色作や「今日からヒットマン」も企画した。最新作は3月公開した「酒中日記」。Vシネマでは「狂弾」シリーズ1~2、「修羅がゆく」シリーズ1~13、「修羅のみち」シリーズ1~12、「極道三国志」シリーズ1~5、「疵(きず)」シリーズ1~5、「マニラ・エマニエル夫人」1~2、「バトルロード」シリーズ1~2、「横浜愚連隊物語」1・2、「新宿愚連隊物語」1・2、「猿飛佐助」シリーズ1~4、「銭道」シリーズ1~6、「荒ぶる魂たち」1~2、「許されざる者」1・2、「伝説のやくざ・ボンノ」1・2、「最後の博徒」1・2、「極道はクリスチャン」、「県警強行殺人班 鬼哭の戦場」1・2、「新極道渡世の素敵な面々」1~2、「チャカ」シリーズ1~2、「九ノ一金融道」、「修羅の蛮王(パンキング)」、「平成金融道」シリーズ1~2、「惚れたらあかん 代紋の掟」、「地獄道」、「女郎蜘蛛」、「会いたくて 愛の殺人者」、「桜の代紋」、などを担当した。TVは日本テレビの火曜9時「マッドポリス 大激闘」シリーズ、同じく「特命刑事」シリーズ、TBS2H「上役の遺した愛人」など。アニメは「なにわ遊侠伝」など28本の作品と関わる。この他に、桑原清・津島研郎・麻乃大樹などのペンネームで24本の映画・ビデオ映画を企画プロデュースする。全国各地の歴史・文化・映画祭に精通し、「オホーツク網走フィルムフェスティバル(網走映画祭)」の開催を1回目から支援している。



【映画監督】

■森川 圭 (もりかわ けい)

これまで1000本以上のAV作品を手掛ける。映画としては『メイクルーム』が3本目の作品となる。実体験を元に執筆した本作は、AV撮影の舞台裏、メイクルームで起こるドタバタの人間模様を温かくユーモラスな視点で描き、ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2015のオフシアター・コンペティション部門グランプリを受賞し、50歳の監督の受賞は過去最年長となった。



【映画監督】

■本田隆一 (ほんだ りゅういち)

1974年神奈川県生まれ。大阪芸術大学映像学科卒業後、日本大学大学院芸術学研究科に入学し映像芸術を専攻。卒業制作として監督した16ミリ長編「東京ハレンチ天国・さよならのブルース」が、2001年ゆうばり国際ファンタスティック映画祭オフシアター部門でグランプリを受賞。トリノ国際映画祭、プチョンファンタスティック映画祭等、海外の映画祭にも招待され、同年暮れに全国五カ所で劇場公開された。以後、劇場用映画、オリジナルビデオ、テレビドラマ等、ジャンルにとらわれず作品を撮り続け、ナンセンスかつシュールだが娯楽味溢れる独自の世界を展開中。映画の代表作は「G S ワンダーランド」('08)「市民ポリス69」('11)「大木家のたのしい旅行・新婚地獄篇」('11)など。TVドラマでは「怨み屋本舗Reboot」('09)「傍聴マニア09」('09)「仮面ティーチャー」('13)などを演出している。



【映画監督】

■久保裕章 (くぼ ひろあき)

1977年東京生まれの京都市育ち。現在は都内在住。2002年にシナリオライター、構成作家として活動を始める。商業活動の傍ら、映画美学校フィクションコース14期に入学し、卒業後、2013年有志と共にDoctor Merrick Productionsを結成。「新旧メロドラマにより映画館にグルーブをもたらす」をスローガンに掲げ、同プロダクション初の長編作品となる『うつろう』を監督したほか、歴史の闇に埋もれたメロドラマクラシックスを発掘・上映するイベントKiss My Stella Dallasを、およそ3ヶ月に一回のペースで行っている。



【映画監督】

■浅沼直也 (あさぬま なおや)

1985年生まれ。長野出身。東放学園映画専門学校卒。東放学園学校校長賞。『えすけーぶ、風呂む』が第3回TSSショートムービーフェスティバルと東放ビデオフェスティバルで準グランプリを獲得。脚本家・我妻正義氏に師事。長編作『HeartBeat』では、ゆうばりファンタスティック映画祭正式出品、SKIP国際Dシネマ映画祭長編部門に正式ノミネート。第6回田辺・弁慶映画祭で市民審査賞を受賞。テアトル新宿、ユロススペースなど全国公開する。文化庁委託事業若手映画作家育成プロジェクト2013の実地研修に選出され、「鉄馬と風」を完成させる。同作は、香港インディペンデント短編映画&ビデオアワード映画祭の審査員セレクションにて上映。